

上海方言に見られる乖離と浸透現象

——「お金の俗称」の変化、および株用語の変遷と浸透状況を通して

虞 萍

概要：1978年，中国实行“改革开放政策”以来，人民的生活发生了翻天覆地的变化。上海市作为中国最大的都市，其变化更是有目共睹。随着上海市民收入的年年增长，上海方言中特有的“钱的俗称”也不断地发生了改变。

小论的目的在于探讨上海方言的变迁状况及变迁原因。具体分析方法主要是结合上海市民收入的变化以及上海市消费者物价指数(CPI)的上升状况、上海股票市场(股市)的发展过程和发展状况细致展开的。

小论归纳了1960年至现今的上海方言中有关“钱的俗称”的变化，并得出了如下结论：上世纪70年代，也就是改革开放前后，可以说是上海方言中使用“钱的俗称”的一个高峰期。80年代以后，上海市民便不再像以往那样频频使用“钱的俗称”了，并且即使使用，“钱的俗称”所代表的数额也越来越大，以至于对于1.00元以下的数额已不再使用以往的俗称了。一些俗称即使被偶尔使用，其数额也和70年代所指的数额“判若鸿沟”。例如，70年代中期，通常指“5.00元”、“50.00元”和“500.00元”的“一只手”这一俗称，到了2000年以后已经成为了5000.00元、50万元、500万元的代名词，并且小于5000.00元的钱的俗称已基本不复存在。笔者暂且在小论中将这种现象称为百姓生活的“上海方言的乖离”现象。笔者认为，“钱的俗称”中显现的这种特征，从某种意义上反映了上海市民收入的增加幅度以及上海市物价上涨速度的一个侧面。与此同时，上海方言中还有许多有关钱的俗语。例如，“x分”的说法等。

另一方面，部分旧上海的股市用语以及部分曾经在80年代初期流行过其后便销声匿迹的股市用语随着中国股市的发展被再次使用。除此以外，上

海股票市场出现了很多新的股票用语。笔者结合 2011 年 2 月 6-9 日在上海市所做的现地调查，总结了上海股票市场的发展过程以及发展状况，着重列举了 90 年代以后出现的一系列股票用语，并分析了部分用语被渗透、援用的现象。笔者认为，80-90 年代中国的股市中出现的“股票暴发户”现象、进入 21 世纪初期以后的“全民炒股”现象也对上海方言中“钱的俗称”使用率的降低甚至消失造成了巨大的影响。

近年股票用语在上海市民的日常生活中得到了浸透，尤其是上海市民在谈婚论嫁时，经常会使用股市里的常用语来比喻男女之间的婚姻关系。甚至可以说，这几年若是不懂股市用语，有时就很有可能听不懂上海市民的侃谈内容。

はじめに

1978 年，中国が「改革開放政策」を実施して以来，人々の生活は大きく変化した。上海市は中国の最大の都市として，凄まじい変化を成し遂げた。上海市民の収入が年々上がるにつれて，彼らの「お金」に対する俗称も大きく変わった。

今まで，上海方言の音韻・語彙，虚詞，助詞の用法などの面で，顕著な変化を起こしていることについてはしばしば論じられてきた⁽¹⁾。また，知覚習得を中心に，中国（北方・上海）方言の影響を考慮しながら，音声環境における日本語の有声・無声破裂音の習得の違いを分析する研究⁽²⁾があり，上海方言の文法に関する研究⁽³⁾も行われている。しかし，管見の及ぶ限り，上海方言における「お金の俗称」の変化および株式市場で使用され

(1) 例えば，胡明揚「上海話一百年来的若干变化」（『中国語文』1978年第3期，1978年3月），宮田一郎「吳語，共通語の文法上の相違について」（『北陸大学紀要』第13号，1989年，p. 149-168），宮田一郎「上海方言の変遷」（『北陸大学紀要』第14号，1990年，p. 111-128）などの論文がある。

(2) 例えば，劉佳琦「中国（北方・上海）方言話者による日本語有声・無声破裂音の知覚に関する一考察——初級学習者を対象として」（『早稲田大学日本語教育研究』第6号，2005年3月，p. 79-89）。

ている株用語の浸透状況に関する研究は見当たらない。上海市における株投資家が途切れなく強大化するにつれて、株式市場で使われている一部の株用語は、上海市民の日常生活、特に婚姻の面で援用されるようになった。

小論は、1960年から今日までの上海方言における「お金の俗称」に関する変化を帰納し、近年上海方言の乖離現象について検討したい。また、筆者が2011年2月6-9日に上海市で行ったインタビューの結果をそれと結び付け、株式市場で使用されている株用語の変遷および浸透状況について整理し、それと関わる上海市民の婚姻理念の特徴について探求したい。

なお、今回のインタビューは、上海証券取引所で長年株投資を行っているベテラン投資家上海市出身の張氏を初め、8名の株投資家に協力を得た。彼らから昨今の株用語について多く教わった。また、本稿は、2008-2010年度愛知大学国際問題研究所共同研究プロジェクトの助成による研究成果の一部である。記して感謝の意を表す。

一 「お金の俗称」に関する変化——1960年代から今日へ

周知のように、中国のお金は三つの単位があり、それぞれは元、角、分である。換算の仕方は1元=10角=100分となっている。図表1で示したように、上海市では、1960、70年代、青年男性と学生は「1分」（「0.01元」）を「一密力」⁽⁴⁾と称した。1970年代初期、一部の賭博好きな青少年は「1分」を「巴克」と称したが、1970年代後期になって、使用する人はほとんどいなくなった。1960、70年代、青年男性は「1角」（「0.10元」）を「一毛里」あるいは「一吊里」と称した。同じ時期に、「1.00元」は「一板兄」や「一起里」と称された。また、上海方言の中で、「魚」と数字の「5」の発音は同じであるため、市場の店員および一部工場労働者は、「5.00元」を「黄

(3) 例えば、佐藤直昭「上海方言の陽入調と軽声化——二重目的語構文の例から」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第2分冊50、2004年、p.181-192）。

(4) 上海方言を太字で表記する。以下同。

(図表1) 上海方言における「お金の俗称」(1960年代から今日へ)

お金 (元)	1960, 70年代	1970年代 初期	1970年代 中期	1980年代	1980年代 後期	1990年代 初期	1990年代 後期	2000年 以降
0.01	一密力	巴克 (隠語)	—— ⁽⁶⁾	——	——	——	——	——
0.10	一毛里/一吊里			——	——	——	——	——
1.00	一板兄/一超里			——	——	——	——	——
5.00	黄魚頭		一隻手 ⁽⁷⁾	半張分		——	——	——
10.00	一根分 一根電線木頭		工農兵 大団結	一張分		一角 (隠語)	——	——
50.00	——	——	一隻手	——	——	——	——	——
100.00	——	一籠 (隠語)	——	——	四人頭	一張紅 一角(隠語)	一張紅	——
500.00	——	——	一隻手	——	——	——	——	——
1,000.00	——	——	一汀分 一塊門汀	一本	——	——	——	——
5,000.00	——	——	——	——	——	——	——	一隻手
1万	——	——	——	——	——	一隻米 一粒米	一隻米 一粒米	一草分 一抄分
5万	——	——	——	——	——	——	——	一隻手
50万	——	——	——	——	——	——	——	一隻手
500万	——	——	——	——	——	——	——	一隻手

出所：筆者が『上海話大詞典』(銭乃榮, 許宝華, 湯珍珠編著, 上海辞書出版社, 2007年), 『上海話大詞典』(ピンイン輸入版, 銭乃榮編著, 上海世紀出版, 上海辞書出版社, 2008年) および2011年2月6-9日に上海市でのインタビュー調査結果に基づいて作成した。

魚頭」と呼んでいた。1980年代に入り、「5.00元」は「半張分」にも呼ばれるようになった。その理由としては、「10.00元」はよく「一張分」と呼ばれていたからである。「10.00元」は1960, 70年代にしばしば「一根分」や「一根電線木頭」と呼ばれていた。1970年代中期、「10.00元」は「工農兵」や「大団結」とも称された。それは10.00元に印刷された労働者(工人), 農

民、解放軍（兵士）と関係があり、すべての大衆が団結して、共産党の指導の下で、「四つの現代化」（それぞれは農業、工業、国防、科学技術の現代化である）⁽⁵⁾ を実現させるために一緒に頑張ろう、という意味が込められていた。

1970年代中期、上海方言における「お金の俗称」は最も多い。この時期はまさに改革開放直前で、人々の収入は少ないが、しかしそれほど貧富の差がない時代であった。その時、お金に対する俗称は1,000.00元止まりであった。1990年代、賭博者は「10.00元」や「100.00元」を「一角」（0.10元）と称した。社会主義国である中国では、「賭博」という行為は決して許されない。その時、警察は町を巡回し、大きい金額で賭博する人を厳しく罰した。そのため、賭博者は賭け金の言い方を換えて、少ないお金の言い方で高い金額を表した。いわゆる「隠語」を使って、賭け金を表した。

1980年以降、中国には「万元戸」、いわゆる貯蓄が1万元を超えた家庭が現れた。人々は昔より裕福になった。都市にしる、農村にしる、人々の収入は増えつつあった。図表2で示したように、2008年、中国全国の農民の純収入は4,760.60元まで上昇し、1978年の133.60元の約36倍になった。中国全国の都市住民の可処分所得は15,780.80元になり、1978年の343.40元の約46倍であった。上海市民の収入も増え続けていた。それに伴って、人々は人民元の最高額面である「100.00元」と関わる機会も増えるようになり、上海市では、「100.00元」に対する呼び方も次々と生まれた。例えば、1970年代初期、賭博者とすりの間で、「100.00元」は「一籠」と称された。1980年代後期、一部教育レベルがそれほど高くない青年の中で、「100.00元」は「四人頭」と称された。当時発行されている額面が「100.00元」の人

(5) 「四つの現代化」は1975年の第四期全国人民代表大会第一回総会で、当時の総理周恩来によって提唱された。内容は「国民経済を發展させ、世界の先進国なみの水準まで向上させる」というものである。

(6) 特にない。以下同。

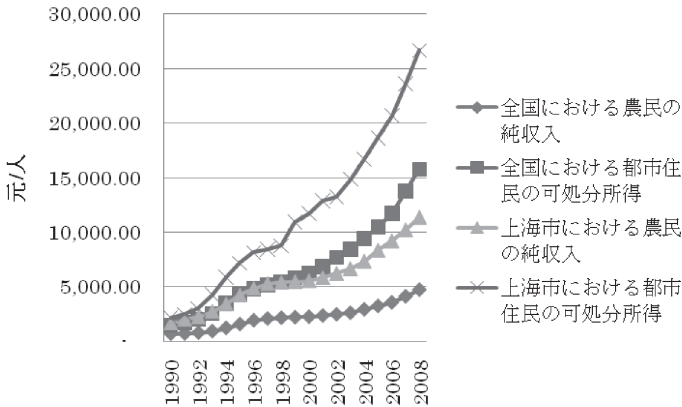
(7) 北方地区では、「一隻手」はすりの意味として使われている。今日、この表現は相変わらず残っている。

(図表2) 中国全国および上海市における城市と農村家庭の収入状況

年	収入 (元)	全国における 農民の純収入	全国における都市 住民の可処分所得	上海市における 農民の純収入	上海市における都市 住民の可処分所得
1978		133.60	343.40	— ⁽⁸⁾	—
1980		191.30	477.60	—	637.00
1985		397.60	739.10	—	1,075.00
1988		544.90	1,180.20	—	1,723.00
1989		601.50	1,373.90	—	1,976.00
1990		686.30	1,510.20	1,665.00	2,183.00
1991		708.60	1,700.60	2,003.00	2,486.00
1992		784.00	2,026.60	2,226.00	3,009.00
1993		921.60	2,577.40	2,727.00	4,277.00
1994		1,221.00	3,496.20	3,437.00	5,868.00
1995		1,577.70	4,283.00	4,246.00	7,172.00
1996		1,926.10	4,838.90	4,846.00	8,159.00
1997		2,090.10	5,160.30	5,277.00	8,439.00
1998		2,162.00	5,425.10	5,407.00	8,773.00
1999		2,210.30	5,854.00	5,481.00	10,932.00
2000		2,253.40	6,280.00	5,565.00	11,718.00
2001		2,366.40	6,859.60	5,850.00	12,883.00
2002		2,475.60	7,702.80	6,212.00	13,250.00
2003		2,622.20	8,472.20	6,658.00	14,867.00
2004		2,936.40	9,421.60	7,337.00	16,683.00
2005		3,254.90	10,493.00	8,342.00	18,645.00
2006		3,587.00	11,759.50	9,213.00	20,668.00
2007		4,140.40	13,785.80	10,222.00	23,623.00
2008		4,760.60	15,780.80	11,385.00	26,675.00

(8) テータ不詳である。以下同。

上海方言に見られる乖離と浸透現象



出所：筆者が『上海統計年鑑 2009』（中華人民共和国上海市統計局編，中国統計出版社，2009年，p. 152, p. 164），『中国情報バンドブック（2009年版）』（21世紀中国総研編，蒼蒼社，2009年，p. 344）に基づいて作成した。

民元には、「毛沢東，周恩来，朱徳，劉少奇」という四人の頭部像が印刷されている。しかし、「100.00 元」の色は「10.00 元」と酷似していたため、「100.00 元」と「10.00 元」を混同して使ってしまう人は後を絶たなかった。1999 年 10 月 1 日，中国では第 5 版「100.00 元」が発行された。新しい「100.00 元」の色は赤となっている，緑っぽい「10.00 元」との区別が一目瞭然である。上海市民はこの毛沢東の頭部像のみ印刷されている赤い百元の紙幣を「一張紅」と称した。

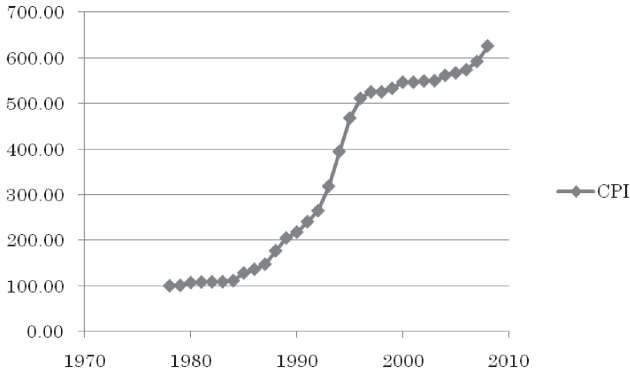
収入が増えると同時に，中国の物価も年々高くなっている。それは図表 3 で示した 1978-2008 年上海市における消費者物価係数（CPI）の上昇状況を通して確認することができる⁽⁹⁾。1980 年代に突入してから，上海市民は 1960, 70 年代のように，「1 分」，「1 角」と「1 元」を他の呼称でほとんど呼ばなくなった。さらに近年では，人民元の中の一番小さい単位であ

(9) 国家によって，消費者物価係数（CPI）に関する計算の仕方が異なる。現時点では，中国が公開している消費者物価係数は住宅に関する内容が含まれていない。「衣，食，住」は人々の生活においては欠かせないことであるが，しかしその大事な「住」を省いて，現時点の中国経済を語ることは非合理的である，と思われる。

(図表3) 上海市における消費者物価指数
(CPI) の上昇状況 (1978-2008)

年	上海市における消費者物価指数 (CPI)
1978	100.00
1979	100.90
1980	106.90
1981	108.30
1982	108.70
1983	108.90
1984	111.30
1985	128.20
1986	136.30
1987	147.30
1988	176.90
1989	205.10
1990	218.00
1991	240.90
1992	265.00
1993	318.50
1994	394.60
1995	468.40
1996	511.50
1997	525.80
1998	525.80
1999	533.70
2000	547.00
2001	547.00
2002	549.80
2003	550.30
2004	562.20
2005	567.60
2006	574.50
2007	592.60
2008	626.80

上海方言に見られる乖離と浸透現象



出所：筆者が『上海統計年鑑 2009』（前掲，p. 124）に基づいて作成した。

る「分」はほとんど使わなくなった。一部のスーパーマーケットでは、レジがより一層スムーズに進むように、「分」単位の支払いは「四捨五入法」を導入した。つまり、金額において、5分以下の端数が出た場合は払わなくてよいが、5分以上の端数が出た場合は「1角」を徴収するというシステムを採択した。日本では到底考えられない支払い方法である。

人々の収入が増えるにつれて、1970年代中期に「一隻手」と称された5.00元、50.00元と500.00元は、2000年以降、多くは5,000.00元、5万元、50万元あるいは500万元を指すようになった。一方、5,000.00元未満のお金に対する俗称は完全に消えてしまった。

1990年代初期、株投資家の中で、「1万元」は「一隻米」、「一粒米」と称したが、その後、個人経営者、企業家の間で広まり、一部の個人業者および中年、青年の従業員の中では、「一草分」や「一抄分」とも呼ぶようになった。この語句の語源は、二通りがある。一つは、一部の青年は、お金をトイレットペーパーと見なし、100枚のトイレットペーパーを「一刀草紙」と称した。もう一つは、1万元はそれほどの大金ではないため、ちょっとしたでも触ると、金額をすぐ推測ができる、という意味である。

中国で起きた過度なインフレを食い止めるために、今年2月9日、4月6日、7月7日に、中央銀行は利息をそれぞれ0.25%ずつ引き上げた。とうとう1年定期預金の利息は3.50%まで引き上げた。利息が上がったとは言え、CPIには到底追いついていない⁽¹⁰⁾。不動産バブルにブレーキをかけるため、中国政府はさまざまな政策を打ち出した⁽¹¹⁾。しかし、わずかな固定資産税「不動産税」および銀行利息の引き上げは、中国の格差問題、不動産バブルを解決することができない。ここ数年、「中国は500.00元もしくは1,000.00元の紙幣を発行した方がいい」、という提案も多く出されている⁽¹²⁾。

上海方言の中で、「お金の俗称」は時代と共に、さまざまな変化が起きている。と同時に、「お金」に関連する表現は相次いで生まれている。例えば、1980年代中期、「分」（人民元を広く指す）という言葉が流行り始めた。そ

(10) 今年6月に公開されたCPIは6.40%である。

(11) 例えば、国務院（中央政府）は2011年1月28日から、個人が所有する住宅を対象とした固定資産税「不動産税」の導入を、上海市と重慶市で試験的に開始した。上海市が新規購入する住宅を主な対象としているのに対し、重慶市は高級住宅を主な課税対象とするなど、導入に際し都市ごとの動きを考慮したのも特徴。住宅価格が高騰を続け不動産バブルの懸念が強まる中、投機目的での購入を抑える狙いで、今後は全国的に導入に向けた動きが広がる可能性も高い。具体的には、上海市では上海戸籍の所有者について、1人当たりの居住面積が60㎡を超える部分が課税対象となる。現在住んでいる住宅は対象外だが、新たに購入する住宅と合わせて基準を超える場合には課税される。上海戸籍を持たない住民は、1軒目の購入であっても1人当たりの居住面積が基準を超えれば課税対象となる。当面は、対象となる物件の1㎡当たり購入価格の7割を対象に、年0.6%を課税する。購入価格が前年度における新築住宅の平均販売価格の2倍以下である物件については、税率を0.4%とする。重慶市で徴収の対象となるのは、同市が直轄する渝中区、沙坪壩区、江北区、九竜坡区、大渡口区、渝北区、北碚区、巴南区、南岸区という9区である。段階的に導入していく方針で、まずは個人が所有する別荘、個人が新たに購入する高級住宅、重慶戸籍を持たず企業主でもない、定職を持たない個人が新たに購入する2軒目以降の住宅を対象とする。税率は対象となる住宅の1㎡当たり購入価格が、同9区における過去2年間の成約面積（新築住宅）の平均単価の3倍未満は0.5%、3-4倍未満は1%、4倍以上は1.2%とする。ただ重慶市以外の戸籍所有者による2軒目以降の購入については0.5%とした。（アジアの経済ビジネス情報NNA、ASIA網、「不動産税の導入開始：上海と重慶で試験的に「建設」」中国2011年1月31日〈月曜日〉、<http://news.nnajp.edgesuite.net/free/news/20110131cny002A.html>に詳しい。2011年8月1日最終確認。）

(12) 搜狐網 <http://zhishi.sohu.com/question/25371609.html?fr=rqm&>、<http://yule.zhishi.sohu.com/question/188574507.html> 2011年8月1日最終確認。

の時から、上海市民はお金を稼ぐことを「扒分」,「畚分」あるいは「抓米」と言うようになった。一部の人は、正規外の収入を稼ぐことを「扒分」と称している。それに関連して、国外に行ってお金を稼ぐことは、「扒洋分」と言う。個人経営者と青少年の間で比較的に流行っていた「好分」,「進分」,「進帳」などの言葉もその時期に生まれて、「お金を儲ける」あるいは「賭け事で勝つ」ことを指すのである。反対語は「壞分」で、お金を使い果たすときは「断分」と言う。

他にも多くのお金に関する言い方に「～分」が使われている。例えば、「肉里分」(汗水たらして稼いだ金)、「搬分」(お金を一ヶ所から別の個所へ移動すること。つまり、お金を借りることである)、「挺分」(お金を払う)、「拉分」(お金を稼ぐ、お金を儲けること)、「踏分」(他人に誘われてお金を稼ぎに行くこと)、「敲分」(お金を騙すこと)、「拗分」(強行して金銭をゆすりとり、お金を騙すこと)、「拖分」(他人に付いてお金を儲ける、利益を得ること)、「宕分」(借金)、「傷分」(お金を費やす、お金を損する)などの言葉がある。「～分」以外、「抓粒頭」も、お金を儲ける意味がある。この言葉は、1990年代初期に生まれて、行商人、無職の人および一部の中年、青年の従業員の間で使われている⁽¹³⁾。

近年、「背米」という言葉もしばしば耳にする。給料および物価が上昇するにつれて、人々は稼ぐあるいは使う金額が段々大きくなり、「掴む」という意味の「抓」では今日の上海市の消費事情に追いつくことができず、「背負う」という意味の「背」で、「お金をたくさん稼ぐ」ことを表すようになった。

以上述べたように、上海市では、1960年代、「お金の俗称」が生まれて、1970年代中期はピークを迎えた。その後、徐々に減り、1980年代以降、「1.00元」未満の金額に対しては「俗称」を言わなくなった。2000年以降、

(13) 錢乃榮、許宝華、湯珍珠編著『上海話大詞典』(上海辞書出版社、2007年) p. 23-24、錢乃榮編著『上海話大詞典』(ペンイン輸入版、上海世紀出版、上海辞書出版社、2008年) p. 35-38、錢乃榮『新世紀上海話新流行語 2500条』(漢語大辞典出版社、2006年)に詳しい。

とうとう 5,000.00 元より大きい金額しか「俗称」を付けなくなった。小論では、上海方言に見られる「お金の俗称」に関するこのような現象を、庶民生活からの「上海方言の乖離」と名付けたい。また、同じ「一隻手」という言い方でも、1970 年代中期は 5.00 元、50.00 元、500.00 元を指していたが、2000 年以降は 5000.00 元、50 万元もしくは 500 万元を指すようになった。このような同じ言葉が時代によって表す金額が随分大きく異なっている現象は、上海市民の収入の増加および上海市における物価の急速な上昇状態、上昇幅に関連している、と考えられる。

2000 年以降、「お金の俗称」は減ったとは言うものの、今日に使われている上海方言の中で、「お金」に関する言葉は決して少なくない。上海市民はさまざまな状況に通じて、新しい言葉を作成し、使うようにしている。小論ではこの現象を、庶民生活への「上海方言の浸透現象」と名付けたい。上海株式市場の発展につれて、数多くの用語が生まれて、変遷している。次には、これらのことについて分析したい。

二 上海株式市場で使用されている用語の変遷状況

株式市場で使われている新しい用語およびこれらの用語の変遷状況を分析する前に、まず上海市における株式市場の発展過程を整理したい。

1 上海株式市場の発展過程および発展状況

1978 年 12 月 18-22 日、中国共産党第十一届中央委員会第三回全体会議が北京市で開催され、鄧小平は「対外的には経済開放し、対内的には経済活性化する」という路線を公開した。これによって、約 40 年間停滞していた上海市の株式市場が再開された。

上海市の株式市場は、三つの段階を経ている。それは、1984 年初期-1986 年末の初期段階、1987 年 1 月-1990 年末の発育段階、1990 年 12 月以降の発展向上段階である⁽¹⁴⁾。1984 年 8 月 10 日、上海市人民政府の許可を

得て、中国人民銀行上海市分行は、中国で株券の発行に関する初めての条例である「株券の発行に関する暫行的管理弁法」（「關於發行股票的暫行管理弁法」）を公布した。これは新中国が成立して以来、地方政府が決めた証券に関する最初の規定であった⁽¹⁵⁾。1986年10月、上海市工商銀行信託部門は、中国で初めての証券取引カウンターを開設し、株券と債券の譲渡売買を取り扱い始めた。1988年4月、国債市場も開放された。1990年11月26日、改革開放以降の中国における初めての証券取引所である「上海証券取引所」が上海市で設立された⁽¹⁶⁾。上海市人民政府が公布した「上海市証券取引管理弁法」（「上海市証券交易管理弁法」）は、12月1日に正式に実施された。これは上海市の証券市場が法治段階に入ったことを意味する。12月19日、当時の上海市市長朱榕基が開業式に出席した。「上海証券取引所」はその日から正式に営業し始めた⁽¹⁷⁾。翌年年末、上海飛樂音響公司（上海飛樂音響会社）、上海延中実業股份有限公司（上海延中実業株式会社）、上海愛使電子設備股份有限公司（上海愛使電子設備株式会社）、上海真空電子器件股份有限公司（上海真空電子機器株式会社）、上海申華電工聯合公司（上海申華電工聯合会社）、上海飛樂股份有限公司（上海飛樂株式会社）、上海豫園商場股份有限公司（上海豫園商業株式会社）、浙江鳳凰化工股份有限公司（浙江鳳凰化学工業株式会社）という8つの企業の株券が上場し⁽¹⁸⁾、共に人民元で購買し、取引をしていた。これらの人民元で購買し、取引する普通株の株券は、「A株」と呼ばれている。従来、「A株」は、国内の機関、組織、あるいは個人（台湾、香港、マカオの投資家を含めない）の間でしか取引ができないが、2002年、適格外国機関投資家制度が導入されてから、海外機関投資家による限定的な投資が認められるようになった。1991年

(14) 中国人民銀行条法司、全国人大常委会法工委編『中国証券与股份制法規大全』法律出版社、1993年。王慶豊、李憲鐸主編『中国的股票市場与股票交易術』北京理工大学出版社、1993年。『上海証券年鑑1992』編輯部編『上海証券年鑑1992』上海人民出版社、1992年、p. 211。

(15) 『上海証券年鑑1992』前掲、p. 371。

(16) 『上海証券年鑑1992』前掲、p. 1。

(17) 『上海証券年鑑1992』前掲、p. 211。

(18) 『上海証券年鑑1992』前掲、p. 219-265。

11月、上海真空電子器件股份有限公司は海外投資家向けに中国の株券歴史上初の「B株」を発行した。「B株」とは、特殊株券であり、人民元で流通の額面を明示し、外貨で購買し、取引する特殊な株券である⁽¹⁹⁾。翌年2月21日、同株（真空B）は上海証券取引所で取引された⁽²⁰⁾。中国のB株市場はこれによって、正式に展開された。2001年6月1日、中国政府はB株市場を国内投資家に全面的に開放した⁽²¹⁾。

1986-1990年、上海市の株券取引額はそれぞれ115万元、524万元、890万元、1,554万元、9,926万元であった。1991年、その額は16.2億元まで上昇し、前5年の累計取引総額の約12.5倍に達した。1990年以前、株券は証券取引総額の約2%しか過ぎないが、1991年、この比率は12.7%に達した⁽²²⁾。2008年になると、A株の株券取引金額は179,762億元に上り、B株の株券取引金額は668億元まで上昇した⁽²³⁾。

株投資の口座分類は、「散户」（A株口座の日皆取引金額は1万元以下である）、「小戸」（A株口座の日皆取引金額は1-10万元である）、「中戸」（A株口座の日皆取引金額は10-50万元である）、「大戸」（A株口座の日皆取引金額は50万元以上である）、「機関」（非A株口座）となっている⁽²⁴⁾。近年、中国で裕福な人が増え、株投資家の投資額も段々増えるようになった。図表4で示したように、2008年末上海証券取引所における株投資家の中

(19) 海外の投資家が中国の株式を購入する方法は4種類ある。①深圳、上海取引所でB株を購入する。②香港取引所でH株（またはレッドチップ）を購入する。③QFII（Qualified Foreign Institutional Investorsの略）でA株を購入する。④シンガポール、ロンドン、東京取引所で海外上場している中国株を購入する。（張志雄、高田勝己『中国株式市場の真実』ダイヤモンド社、2007年、p.254。）

(20) 『上海証券年鑑1992』前掲、p.215。

(21) 2001年6月2日の「日経新聞」による。

(22) 『上海証券年鑑1992』前掲、p.212。しかし、『上海統計年鑑2009』（中華人民共和國上海市統計局編、中国統計出版社、2009年、p.330）によると、1991年、上海証券取引所の有価証券（小切手、株券、船荷証券などを指す：虞注）のうち、A株の株券取引金額は8億元となっている。この二つのデータに大きな誤差がある。

(23) 『上海統計年鑑2009』前掲、p.330。

(24) 上海証券交易所網 <http://www.sse.com.cn/sseportal/ps/zhs/home.html> 2011年8月1日最終確認。

(図表 4) 2008年末、上海証券取引所における株投資家の株券所有状況

個人投資家	市場値 (億元)	比率 (%)	戸数 (万戸)	比率 (%)
		13,486.39	42.23	2,759.81
10万元未満	4,800.67	15.03	2,508.05	90.6626
10-30万元	3,079.39	9.64	188.19	6.8028
30-100万元	2,585.94	8.10	52.19	1.8867
100-300万元	1,463.11	4.58	9.28	0.3356
300-1,000万元	864.36	2.71	1.80	0.0652
1,000万元以上	692.93	2.17	0.29	0.0105
一般法人	10,066.64	31.52	4.40	0.1590
専門機構	8,380.21	26.24	2.14	0.0776
そのうちの投資基金	6,025.92	18.87	0.03	0.0012

出所：上海証券交易所編『上海証券交易所統計年鑑 2009巻』上海人民出版社，世紀出版集団，2009年，p. 360。

で、1,000 万元の株券を所有している人は 2,900 戸まで膨張した。

2007 年 3 月 6 日、「新華網」に公開されている「2007 年全国『两会』特別討論課題」によると、中国政協委員、國務院發展研究センターの研究員呉敬璉は、『中国のすべての国民が投機目的で株券の売買をしている』（『全民炒股』）という現象は正常ではない⁽²⁵⁾、と指摘した。これは少し誇張した表現ではあるが、中国人が株に夢中する様子を象徴的に表したと言えよう。上海市は中国の最大な都市として、株投資者数が多い。図表 5 で示したように、2008 年まで、上海証券取引所における株投資家の口座開設は総計 6,542.6 万戸に達した⁽²⁶⁾。うち、男性は 3,345.46 万人で、女性は 2,778.18 万人となっており、その比率はそれぞれ 54.63% と 45.37% である。この

(25) 新華網 http://webcache.googleusercontent.com/search?q=cache:6eiv-if6WfsJ:news.xinhuanet.com/fortune/2007-03/06/content_5805578.htm+%E5%85%A8%E6%B0%91%E7%82%92%E8%82%A1&cd=9&hl=ja&ct=clnk&gl=jp 2011 年 8 月 1 日最終確認。

(26) 上海証券交易所編『上海証券交易所統計年鑑 2009 巻』上海人民出版社，世紀出版集団，2009 年，p. 359。

(図表5) 上海証券取引所における株投資家の口座開設状況(1992-2008)

年	A株+B株(万戸)			A株(万戸)			B株(万戸)		
	総数	個人	機構	総数	個人	機構	総数	個人	機構
1992	111.2	110.5	0.7	111.2	110.2	0.7	0.0	0.0	0.0
1993	423.5	421.9	1.6	422.5	421.1	1.4	1.0	0.8	0.2
1994	574.9	572.6	2.3	573.0	571.0	2.0	1.9	1.6	0.3
1995	685.2	682.3	2.9	682.5	680.0	2.5	2.7	2.3	0.4
1996	1,207.9	1,204.1	3.8	1,203.3	1,200.0	3.3	4.6	4.1	0.5
1997	1,713.3	1,708.1	5.2	1,706.8	1,702.2	4.6	6.5	5.9	0.6
1998	1,999.4	1,993.1	6.3	1,991.6	1,986.1	5.6	7.8	7.1	0.7
1999	2,281.1	2,272.8	8.3	2,272.2	2,264.7	7.6	8.9	8.1	0.8
2000	2,957.8	2,944.9	13.0	2,943.3	2,931.2	12.1	14.5	13.7	0.8
2001	3,419.8	3,403.1	16.8	3,326.9	3,311.1	15.9	92.9	92.0	0.9
2002	3,556.0	3,536.9	19.1	3,459.5	3,441.4	18.1	96.4	95.5	1.0
2003	3,632.1	3,612.1	20.0	3,534.0	3,535.1	19.0	98.1	97.1	1.0
2004	3,703.1	3,682.4	20.7	3,603.7	3,584.2	19.5	99.4	98.2	1.1
2005	3,747.9	3,726.6	21.3	3,648.1	3,628.0	20.1	99.9	98.6	1.2
2006	3,901.5	3,878.8	22.8	3,799.9	3,778.5	21.4	101.6	100.3	1.3
2007	5,817.0	5,788.2	28.8	5,673.2	5,645.9	27.3	143.8	142.4	1.5
2008	6,542.6	6,510.9	31.7	6,395.5	6,365.4	30.1	147.1	145.5	1.6

『上海証券交易所統計年鑑 2009巻』前掲, p. 357。

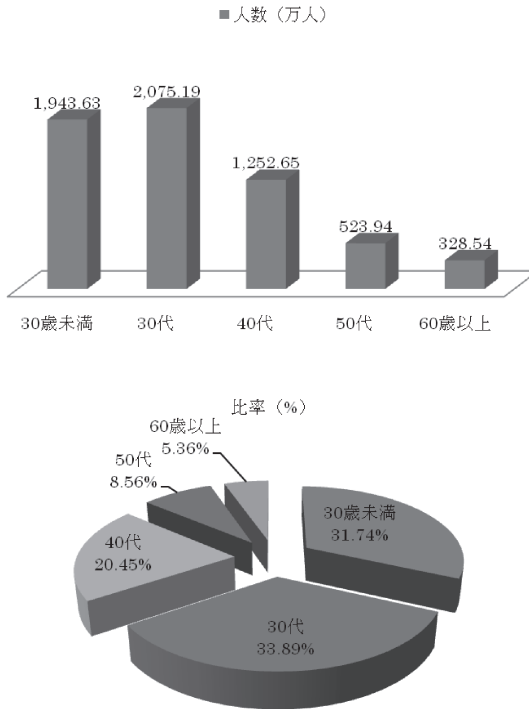
データから見ると、男性の株投資家は女性より少し多いが、男女ともに株に興味があることが読み取れる。

図表6で示したように、『上海証券交易所統計年鑑 2009巻』のデータによると、上海証券取引所にいる株投資家の中で、30代の人が最も多くて、その数は2,075.19万人まで達しており、比率は株投資家総数の33.89%に達している。次には、30歳未満と40代の人であり、その比率はそれぞれ31.74%、20.45%を占めている。

上海方言に見られる乖離と浸透現象

(図表6) 2008年, 上海証券取引所における株投資家の年齢分布状況

年齢	30歳未満	30代	40代	50代	60歳以上
人数(万人)	1,943.63	2,075.19	1,252.65	523.94	328.54
比率(%)	31.74	33.89	20.45	8.56	5.36

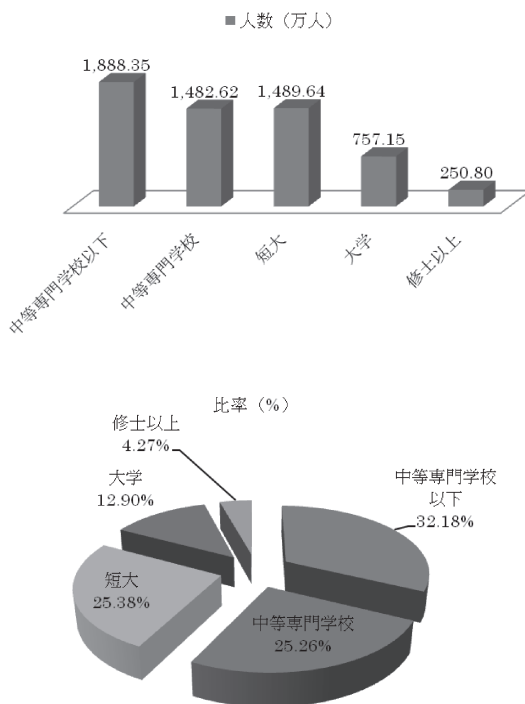


『上海証券交易所統計年鑑 2009 巻』前掲, p. 359。

図表7で示したように, 上海市にいる株投資家の学歴分布を見ると, 中等専門学校以下の学歴の人は最も多いが, 投資家全体の三割以上を占めている。それからは短大, 中等専門学校, 大学, 修士以上の順で, それぞれは 25.38%, 25.26%, 12.90%と 4.27%である。修士以上の高学歴の投資家は比較的少ない。

(図表7) 上海証券取引所における株投資家の学歴分布状況

学歴	中等専門 学校以下	中等専門 学校	短大	大学	修士以上
人数 (万人)	1,888.35	1,482.62	1,489.64	757.15	250.80
比率 (%)	32.18	25.26	25.38	12.90	4.27



『上海証券交易所統計年鑑 2009 巻』前掲, p. 359。

以上のように、上海証券取引所にいる株投資家は若い世代に集中し、教育レベルはそれほど高くない、という特徴がある。

上海市の株投資家が増えるにつれて、上海方言の中で多くの株式市場に関する新語が現れた。と同時に、本来人々の日常生活の中ですでに使われ

ている言葉が新たな喩えによって株式市場で使われるようになった。次には、これらのことについて分析したい。

2 上海株式市場で生まれた新語および言葉の意味変遷

1984年初期、上海市の株式市場が展開されて以来、株券に関するさまざまな新しい上海方言が生まれた。例えば、1980年代末期から、人々は発行量が大きくて、ある一定の期間内に、全体の株式市場において他の株券に影響し、呼びかける力を持つ株券を「龍頭股」（「トップ銘柄」）と称した。1990年代に入り、さらに多くの株券用語が生まれた。例えば、「吊空」（株式市場の価格が良性的な発展軌道を背離し、実際の価格から離れて膨張すること）、「回吐」（株投資家が一定の利潤を獲得した後、株券をあまり貪欲に売りにたくない、あるいは適切な調整を行われてから投資したいという意味）、「買気」（証券市場、特に株式市場の買い手の自信を指す。反対語は「売気」である）、「托盘」（株価が連続して下落するとき、株式市場の局面を支える力。つまり、巨額の資金を投入し、あるいは株券を引き継ぐ人が現れること）、「底板価」（基本的な価格、原価。時には最低価格にも意味する。主に商売人、行商人、株投資家などの集団で使われている）、「逃脱」（価格ラインが比較的に高く、リスクが比較的に大きいとき、株券下落する前に、すでに投げ売りされたこと。短期的な株投資家の中で使用されている）、「檔」（ランク、株価の上がり下がり計算する幅、「元」を単位とし、1.00元は1檔で類推する）、「套牢」（高い価格で株券を買い入れた後、株価が続けて下落したため、投資資金が困ることに至ること）、「談頭」（大勢の人が集まって、高い声で議論すること。株券のブームが上昇したため、ますます多くの株投資家は市況、情報の伝達を洞察し、消息を伝達し、集まって高い声で株式市場に対する見方を議論すること）、「攔脱」（証券、あるいは株券の売り出し。株の短期投資家などの間で使用されている）、「崩盤」（株価が株投資家の心理警戒線を越えて膨張したが、突然下降する。「市場崩壊」という意味である。1992年から株式市場で流行り始めた）、「船隊」

(自発的で、緩んだ資金の集合体)、「盘子」(株券などの発行規模)、「盘檔」(「盘整」とも言う。株取引市場の株価を調整する、という意味である)、「熊市」(反対語は「牛市」である。価格が持続的に下落する株式市場の情勢を指す。1990年代初期、深圳の株式市場で使われ始めた)、「踏空」(判断不足、あるいは決心がつかないため、株券を買い入れる好機を逃すこと。遅れて、あるいは目的達成できなくなることを指す。1992年下半年以降から使われるようになった)などがある。

また、一部元々日常生活の中で使われている単語は株式市場で新たな意味を付け加えられて、使用されるようになった。例えば、「坐月子」(元々は妊婦が産後一ヶ月の間に家で養生を意味するが、株用語では、株式市場がしばらく挫折し、一ヶ月ぐらいに過ぎるとようやく回復される、という現象を指す)、「畚分」(正規外の収入を稼ぎ、正規外の収入をすくい取ることを比喩する。株式市場に限らず、切手の取引市場にも流行っている)、「爆炸」(株券の市価が考えられない高價位に上がったため、株投資家は心理的な圧力に耐えられなくなり、株券を次から次へと売り出す。それによって、株価が突然暴落する)、「割肉」(株価が下落して、資金が損する状況で、株投資家は苦痛に耐えて、株券を売り出す。1992年頃使い始め、株投資家、特に短期的な売買をする株投資家の間で流行っている)、「吊籃頭」(株取引の中で、売値を設定し、取引を待つこと)。

それ以外、一部の旧上海の株式市場⁽²⁷⁾ で使われた用語は、1990年代初期の「株券ブーム」によって、再び流行り始めた。例えば、「回檔」(株の上がり下がり合理的な価格ラインに戻ることに)、「回落」(株価が規則に合って、合理的に下落すること。つまり、正常な下落という意味である)などの用語がある。

また、一部1980年代初期に流行っていたが、その後、しばらくの間にあ

(27) 旧上海の証券取引所については、『旧上海市証券交易所』(上海市檔案館編、上海古籍出版社、1992年)に詳しい。

まり使われなくなった用語は、1990年代以降、株式市場で再び使われるようになった。例えば、1980年代、人々はマージャンをするとき、さまざまな方法を使って勝とうとする行為を「搶跑道」と称した。今日では、「搶跑道」は株式市場で、先を争って、コンピュータに株の取引情報を入力する申告方法となった。元々は賭け事でお金を儲けたときに使われた「拉進」、あるいは「喫進」は、1990年代初期になって、短期的な投機を狙う株投資家が証券取引をするとき、特に株を購入するときに、再び使われるようになった。取引の金額が大きい証券会社、機関、あるいは富豪が株を購入する行為は「刮進」とも言う。1980年代末期に現れて、主に行商人、商売人と一部の中年および青年労働者の間で流行り始めた「底分」は、1990年代以降、株投資家の間で常用語になり、「基本金、基本的な貯金」という意味を持つようになった。株取引市場において、取引の量にしる、株価にしる、どちらも徘徊している、という現象を表す単語は「盤局」である。この単語も一時的に使用されなくなったが、1990年代初期以降、株式市場で再び流行るようになった。

他方、1990年代初期株式市場で使われた語句は、今日ではすでに存在しないものもある。例えば、「吊價位」（株価の上昇と下落を人為的に促し、高値で売り出し、安値で買い取るという投機行為を企んで、狙うこと）。1990年代初期の中国株式市場では、毎日の上がり下がり幅における制限が決められていないため、「吊價位」という言い方は株式市場の圏内で流行っていた⁽²⁸⁾。しかし、今日では上がり下がり幅の制限が「檔」と決められたため、「吊價位」という言い方も株式市場のルール変化によって、消えてしまった。

張志雄、高田勝己の分析によると、中国の株成金を生み出した波は5つある。それぞれは、1980年代末-1990年代初の国債、1992年の新株購入証、1990年初の「一級半市場」⁽²⁹⁾、1996年前後の「国債先物」市場と「鼠倉」

(28) 阮恒輝、吳繼平編著『上海話流行語辭典』漢語大詞典出版社、1994年。

および「流通株・非流通株問題」、すなわち「株改」である。1980-90年代、中国の株式市場に表れた「株成金現象」も上海方言の中の「お金の俗称」の使用頻度の低下に影響したに違いない⁽³⁰⁾。

以上のように、上海市における株式市場で生まれた新方言および言葉の意味変遷を整理し、帰納した。

次には、株式市場の用語が日常生活での応用、特に上海市民近年の「婚姻理念」に結び付けて分析したい。

三 株式市場用語の日常生活での応用

——上海市民近年の「婚姻理念」に結び付けて

近年、上海市では、大量の株式市場の用語が上海市民の日常生活、特に婚姻の面で用いられるようになった⁽³¹⁾。例えば、恋愛経験がない人は「新股」（新しい株）と呼ばれ、発展できそうな恋愛対象は「潜力股」（潜在力がある株）と呼ばれるようになった。結婚相手の募集が失敗したときは「踏空」と呼ばれた。一方、彼女、ガールフレンドのことは「戸頭」と呼び、それに関連して、「開戸」とは、若者が結婚後、両親と別々で暮らすことを指す。元々は株価が上から下まで揺れ動きが大きくなって、安定な段階にいるという意味で使われた「盘整」は、今日では、「恋愛関係は現状維持する」ということに比喩されるようになった。

最初に発行された株券である「原始股」は、今日では、「初婚または婚姻関係を維持し、離婚していない夫婦のこと」を指している。「抛出原始股」とは、青年男女が初めて交際することを指す。「垃圾股」はどうしようもな

(29) 「一級市場」はいわゆる新株発行市場、「二級市場」は流通市場を指す。「一級半市場」は両者の中間に存在する市場である。すなわち、すでに発行されたがまだ市場に出回っていない株を売買し、利ざやを稼ぐ市場である。（『中国株式市場の真実』前掲、p. 230を参照した。）

(30) 『中国株式市場の真実』前掲、p. 227-254に詳しい。

(31) 上海市における結婚消費については、『上海結婚消費指南』（上海市婚姻服務中心編、上海人民出版社、2007年、p. 10-94）に詳しい。

い、あるいは発展できそうにない恋人のことが喩えられている。一方、理想的な嫁をもらった、あるいは事業において発展できそうな人と結婚ができた場合、上海市民は「績優股が買えた」、と言う。元々は株券を買った後値段がすぐに下落した場合と称された「套牢」は、近年では、一部の男性は妻子持ちになってから、独身時代の自由自在な生活を送れなくなったことを指すようになった。「套牢」を緩和する方法としては、運命を受け入れるか、あるいは、「解套」（いわゆる離婚する）しかない。「平包」とは、夫婦が離婚するときの財産分与である。再婚者は結婚の回数によって、「二手股」、「三手股」と呼ばれている。

株券を買い入れた後、買った量が少なかったことに気づき、あるいは株価は下落して底固めされたため、一部の人は一定の数量を追加して買い入れて、損失金額を減らそうとする。このような行為は株式市場では、「補倉」と称す。ここ数年、日常生活の中で、上海市民はしばしばチャンスを逃がさずに他人の婚姻の空白を埋め、あるいは感情の空白を埋める行為を「補倉」と称すようになった。また、離婚後、再び結婚し、家庭を作る行為は、株式市場の用語で喩えると「資産重組」になる⁽³²⁾。

以上述べたように、近年、上海市では、株式市場の用語がわからなければ、場合によっては、上海市民の会話には付いていけなくなる傾向がある。そのため、たとえ株券の売買を行わない上海市民でも、時代遅れにならないように、以上のような株券用語を真剣に覚え、自ら会話の中でこれらの株券用語を積極的に取り入れようとしている。

おわりに

以上近年上海方言の「お金の俗称」における変化、および株式市場の発展に伴う株用語の変遷と浸透状況という二つの面を通して整理し、分析し

(32) 阮恒輝、吳繼平『上海市井閑話』上海辞書出版社、2009年、p. 144-154。『上海話大詞典』前掲、p. 29-30。

た。

「お金の俗称」は1970年代のピークを迎えた後、その数および使用頻度が徐々に減り、2000年以降には、とうとう5,000.00元以上の金額しか俗称で言わなくなった。上海市民は目まぐるしい経済発展に追われて、不動産価格の高騰、過激な物価上昇などの外部要因で、人々は以前のようにお金に対する俗称をあまり使わなくなった。筆者はこの現象を、庶民生活からの「上海方言の乖離」と呼ぶ。

他方、一部旧上海の株券用語および1980年代初期に流行っていたが、その後、しばらくの間にはあまり使われなくなった用語は、1990年代以降、株式市場の繁栄によって、再び使われるようになった。近年、株式市場が発展するにつれて、一部株式市場で使われている用語が上海市民の日常生活に浸透し、特に婚姻の関係を表すときにしばしば応用されるようになった。株券用語に関する知識がなければ、時には上海市民同士の会話についていけなくなる傾向が見られる。

上海方言はこれからも中国経済と共に密接に関連し、市民生活水準の高まり、生活スタイルの多様性に応じて、絶えず変化していくのであろう。